



炎の玉が街道を走る。

隊列の正面にいた兵士に炸裂する。子どものキャッチボールくらいの速度で火球は飛んで行った。普段のそいつであれば簡単によけられたはずだが、今日は調子が悪かった。無理な行軍と急な指揮系統のすげ替えは辺境最強のゴブリンであつても混乱した。昨日酒が飲めなかったからかもしれない。

「もう……あと〰発しか出せないよ」

息を切らしながら杖を両手に少年は背中荷馬車に報告する。帳を覗けば、荷物に埋まるように御者が震えている。それと修道服を着た大男が女に馬乗りになり、叩き起こしている。

「起きろ！ 戦え！ 仕事だ！」

修道士の大男はとって食ってしまうような剣幕で女の襟元を掴み揺らしながら叫んでいる。女は揺らされるばかりで、あと二分くらいとまだ寝る気のうわ言を言っている。

いる。

大男がこちらに目を向けたかと思うと、何かを投げってきた。頬を掠めるギリギリで投げられたそれはすぐ後ろのくぐもった鳴咽という結果をもたらした。粗末な棍棒を振り上げたゴブリンが背後まで忍び寄ってきていたのだ。

「油断するなぼけ」

女はそうこぼすように言う。女は近くの荷物を適当に漁り、また何個か投擲する。そのたびゴブリンのうめき声が生まれる。

「十から十五くらいの小規模のゴブリン集団だ。武装しているが、ゴブリン内のリーダー格が不在で統率が取れていない。まともな弓兵やシャーマンはいない。おそろく巢のなかで分裂がおきて敗走した集団か、何かの斥候だと思われるが……」

「わかった。わーったつて。さっさとどけよ」

女は片手で邪魔な大男を押しのと、自分の得物を取りに行く。御者が隠れるための荷物に紛れたらしい。大男は女が完全に覚醒したのを見て、荷馬車から降り少年魔法使いの前に立つ。ゴブリンたちは、自分たちより同じかそれ以下の少年魔法使いには精神的優位を保っていたが、さすがに三倍以上の体躯がある男に無謀に飛び込むことはなかった。近くの木々に隠れ作戦会議めいた何かをし始める。ボロボロの弓をつがえるもの、少年魔

法使いを狙うもの、女が少し見えたことで下卑た笑いと妄想を共有するものたち。そこにゴブリンの頭が空を飛び突っ込んでくる。一人のよそ見していたゴ布林に当たり、ぎやあぎやあと喧騒と混乱が起きる。大男がまた倒れたゴブリンの首を捻り、投げ飛ばす。熟れすぎた果実が潰れるように死んだ頭と生きた頭が潰れていく。大男が簡単にやつてのけるのを見て、頼もしさを感じると同時に少年魔法使いは自分のちっぽけさを齒噛みする。戦闘のときはいつもこうだった。役割は理解しているもののまだ少年は少年だった。

「なーんだ。雑魚でもないやんけ。けっけっ」

荷馬車から顔を覗かせて女は言う。変な笑い方。

「こんなんにピーピー言ってたんか。少年」

「馬鹿、ぐーぐー言ってたお前は何も言えることはない。お前が一時間以上寝ていられたのは魔法使い殿が頑張ってくれたからだ」

軽口を叩く二人。その横で自分ノ仕事を全うする少年魔法使い。大気の流れ、探索魔法から反応があったのだ。さまざまな欲望ひしめくゴ布林とは違い、明確な敵意だけが迫ってくる。ざわつく感覚を頼りに方角を定め、正体を割り出す。疑問はつい言葉になる。

「これは……ゴースト？ アンデッド？ なんてこんな真っ昼間に」

「どうかされたか。魔法使い殿」

「あえ……探知魔法に反応があったので。ですけどこんな昼間の明るい場所で霊的存在が出るはずなのに……。ちよっと調べなおります」

「いや、その必要はないぜ。魔法少年」

唐突に金属音が響き渡る。金属と金属が、鎧や剣がぶつかりこすり合うような音が聞こえる。そして馬が全力で走るような蹄の音。おかしいのは聞こえ始めるにしては音の発生源が近すぎること。待ち伏せされていたのか、もしくは今そこに現れたのか。

「なんだこれ……こんな高位の霊的存在がこんなところに出るなんて。一体誰が召喚してるんだ……？」

「おい、下つてな少年。鈍感修道士も下がれ、私一人でやれると思う。ゴ布林なんかより私向きのやつが来た」

「わかった。無茶はするな……いやこっちに被害を出すなよ。さ、行きますよ魔法使い殿」

脇を持ち上げられ後ろに下げられる少年魔法使い。無意識下に展開していた探索魔法の陣が解けて、現実意識を戻す。探索魔法は解けたものの、最後に導き出された相手の存在は木々の中、街道の脇。木々をものともせず馬の全力疾走で駆けてゆく速さ。まるで平地を走っているような、木々を通り抜けている移動速度のそれはけたたましい金属音で敵意を表していた。

「霊的存在、霊体に物理攻撃は通りません！ ここは僕

が……」

「なーに、安心しな。私のハンマーに潰せないものはいよ」

そう言つて女はひょいと荷馬車から降りる。そしてガシヤンという着地音がする。女が降りたとき荷馬車が大きく揺れた。女の得物はハンマー。少年魔法使いが丸まれば隠れるのサイズの、巨大なハンマーを片手に背負う。しかしあまりに無骨でふざけた外見をしていた。金属の棒に巨大な旅行鞆を括り付けたそれは、武器と言つていいものではない。ただそれを嬉々として振り回す女を止めるものは居ない。強いて言うなら隠れ場所を失つた御者が恐る恐る外を覗いているくらいだ。

肩に担ぐハンマーのようなものの影が、木漏れ日の中で異様に長く伸びる。鎧と蹄の音は鼓膜を揺らすほど近い。不意に音が止まる。そしてフツと木々をすり抜けるように正体不明の敵意は姿を現した。

現れたのは揺らめく青い炎に包まれた半透明の馬に跨がる騎士だった。全身鎧の隙間から骨が垣間見え生者でないことが一目で分かる。顔は蜃気楼のように朧で目も鼻も判別つかないが、揺らめく煙の間から見たのは白いドクロ。骸骨騎士、現し世の存在ではない。騎士の姿を保つほどの強い執念に縛られた、霊的存在。上位の戦士であろうとまず逃げの一手を選ぶ。少年魔法使いは霊体授業を思い出す。騎士の霊は生前がどんなものであれ

呼び出された以上、高位の呪詛を纏い、生者を憎むことに特化した殺戮者と化す。まあそんなものに会えるものなら出会いたいものだ、そう先生は言っていた。

「へあ……騎士様か。おい少年、百発くらい撃つたら倒せるんじゃないか？」

「ばっ……ばか。早くにげるんですよ！」

そう言つて這つてでも逃げ出そうとする少年魔法使いを修道士の大男が掴んで止める。周囲を指し示しながら諭すように言う。

「精霊たちと交信が途切れしました。おそらく魔術的な結界が張られています。またゴブリンの増援が周辺を取り囲んでおり、先ほどの奴らより装備が強靱です。あの騎士から逃げながら脱出は難しいかと」

木々や草むらから赤い目が見える。緑色の肌が確認できただけでもさっきの二倍以上はいる。骸骨騎士が虚空に手を伸ばす。青白い煙が集まっていき、金属音を響かせ銀色の槍が現出する。半透明の馬が嘶くように身を振らせ蹄を鳴らす。

「簡単簡単。騎士以外はさっきの雑魚と大差ないんだろ？ 騎士ぶつ飛ばせばそれで勝ちなんじゃない」

変なハンマーを肩に担ぎ直すと、彼女はふらふらと騎士の前に出た。歩いているが、酔いの残った足取りだった。それでも身の丈以上の得物を担いでバランスを取っているだけおかしくはある。

「こい。こい」

骸骨騎士が煙をまとった槍を構える。地面を削る勢いで突進してくる。霊体の馬は音はけたたましいが地面には一切跡を残さない。骸骨騎士の銀色の槍が女を貫く。だがその直前、振り上げたハンマーが煙を払う。耳をつんざく重い衝撃音が鳴る。

騎士の槍とハンマーが交差し激突した。骸骨とは思えぬ轟音。衝突の余波で周囲の木々の葉が舞い上がり木々が揺れる。御者の悲鳴とゴブリンの悲鳴が共鳴する。睨み合いのあと、我慢比べに折れたのは骸骨騎士だった。変な荷物棒を振り払うとチャージのために離れ馬を走らせる。骸骨の鼻先は隙をうかがうように女を向いている。一方女は、ハンマーを下ろし痺れた手をにぎにぎしていた。

「ひー、いつでもえ、いつでもえ。腕なくなるかと思ったわ」

「霊体と打ち合った……？」

女が無事だった安心より、疑問のほうが強かった。霊体は、現し世ではない存在は基本的に生きているものに対して作用できない。彼らはガラス越しの観測者に過ぎずこの世界の住人ではないから。彼らと接触するには魔法を使うか霊体に干渉する大掛かりな魔法陣が必要だ。別のクラスの友達が死んだペットに会うために何ヶ月も準備していたことを少年魔法使いは思い出す。

「あいつのハンマーは呪物に近い」

「呪物？ 魔女とかシャーマンとかのやつですか？」

「ええはい。魂の怨嗟の音が魔法なり呪いなりに結びつき絡み合ったものです。あのハンマーについてる鞆のなかにはあいつの趣味の物が入っています。被害者の怨嗟の音があれに封じられているのです」

あの人の趣味を考えれば確かに憎しみや怨嗟の声に暇がないだろうなと少年は思う。特に男性の。彼女が魔法学校で起こした数々の事件を思い出せば呪物であると納得できた。少年は咄嗟に尻を守るように抑えた。被害者にはならなかったが、隣のベッドで起きていたことを思い出したのだ。

「危ない！ 魔法使い殿！」

修道士の大きな拳が少年の頭上を掠める。待つのに飽きたゴ布林が取り囲んでいたのだ。修道士の拳は出っ張った鼻を潰した。そして仰け反り剣を離れた細い腕を掴みゴ布林を振り回した。体液と歯が撒き散らされる。ゴ布林たちは恐れから一步引くものの、弓をつがえ始める。修道士が冷や汗をかくが少年魔法使いは賭けにでた。一番早く弓を準備したゴ布林に火小球の魔法を放った。目の前の修道士と弓に夢中になっていたのか避ける素振りをせず顔面に炎が咲いた。ゴ布林たちが驚いて撃たれたゴ布林と魔法使いを見る。戦力として数えていなかった存在が攻撃してきたのだ。少しばかりの動揺を修道士は見逃さなかった。踏み込みゴ布林の死体

を振り回し、体のゴブリンの首を折る。

「魔法使い殿！」

「大丈夫です！ あと一回は撃てます」

嘘だ。互いにそう思った。実際魔法使いはあと一回魔法を使えばヘロヘロのガキになり動けなくなる。しかしあと二十体以上はいるであろうゴブリンと読み合いを仕掛けるにはこれしか無かった。草むらや木々から出てきたゴブリンは ∞ 体。戦力計算で時間を稼ぐにはうってつけの数字だった。ゴブリンとて人語を介せない訳では無い。頭が使える手強いのは躊躇するだろうという読みだった。

「ちよつとー、そつちは任せるよー」

骸骨騎士の突進を捌きながら女は言う。本当は援護が欲しかったのだがそれを言える状況ではなかった。ハンマー女は明らかに防戦一方だった。ハンマー女が汗だらだらなのに対して骸骨騎士の動きにブレはなかった。捌き続けられているものの、横槍が入ればかなり厳しいだろうというのは、近接戦闘に素養がない魔法使いでもわかった。それどころかそもそも機動力も防御力も攻撃力だつて相手の方が上なのにまだ女が立っている方がおかしかった。呪物とは言っていたがまともな武器じゃあない、伊達や酔狂でもない、そこら辺にあった荷物をまとめたような棒切れで戦っているのがおかしいのだ。そんな少年の不安が伝わったのか女は振り向く。

「大丈夫大丈夫。次で倒すからさ、援護頼むよー。うわっわわ」

戦場を俯瞰していたゴブリンでもいたのだろうか、何発かの矢が女のもとへ飛ぶ。隠し玉でも使おうとしていたのか戦士にしては不格好な足運びで、なんとか矢の間を縫っていく。そこに蹄が迫る。溜め終わり最高速度で貫こうとする槍が来る。

ゴブリンの矢に対応すれば槍に貫かれ、槍に対応すれば一斉射を食らう。少年は即座に行動しなければならなかった。修道士の男に援護を頼むことは考えなかった。倒れた自分を守る存在が必要だったからだ。弓を構えるゴブリンを数える。四体。差はあれど槍とハンマーの接触の瞬間に矢を放つのは間違いない。四つの魔法陣を頭の中に思い描く。たった一回分しかない余力を大幅に超えた魔法詠唱。二回ならまだしも、明らかに無理があつた。炎魔授業のときの先生の言葉がよぎる。限界を超えた魔法は大抵後悔する。戦闘職をするならそんな状況に耐えない努力を最優先にしる。少年にはこれしか手札は残っていないかった。しかし他の誰かの手札なら何とかなると思った。それよりもゴブリンの尻の肉にはなりたくなかった。

「いま！」

骸骨騎士の槍が射程圏内に入ったとき、女は叫んだ。脳内の魔法陣が輝き、現実の火の玉となつて飛んでいく。

輝いた魔法陣は三つ、一つは脳内のイメージ全体にヒビが入り霧散してしまった。三体のゴブリンにあたるが軽く炙っただけで特に傷はない。しかし矢の狙いそらずには十分だった。

撃たれなかったゴブリンの狙いは正確だった。ハンマー女を仕留めるには頭か手、足を狙えばよかった。背中 positional に荷馬車が邪魔だった。頭と手は変なハンマーのせいで軌道が予測できなかった。足は骸骨騎士の突進を受け流すため鏑迫り合いの際しつかりと固定されていた。ゴブリンはそこを狙った。

女は歪なハンマーで超速の槍を張り倒すように振った。足は踏ん張らなかつた、反動で身体が浮かび上がるように。矢は虚空を切り、槍は地面に刺さった。体勢を崩し動きを止めた骸骨騎士に、変なハンマーが振り下ろされた。

砕けた鎧が空中に消えていくのを見て、少年は意識を手放した。



「だからな、ドラゴンと馬車が……グググッてこう、

な？」

「わかったわかった。わかっております」

「このときドラゴンはバカなのか賢いアホなのかっていう議論をな？ したんだよ私は」

「そうかそうか。よかったな」

「ドラゴンはバカだから馬車をメスの尻と誤認しているのか、賢いアホだから馬車を気持ちのいい穴と認識してるのか。これがワイバーンとかのドラゴンモドキがやってるならドラゴンはバカでいいんだが。ドラゴンの体液は特殊なんだ。特に生きているときの体液は乾くと独特の色味を出す。その色味が内部にこびりついた馬車が何台も昔から見つかってるんだ。な、不思議だろ」

「……起こしてしまったか」

少年は馬車の揺れで意識を呼び覚ました。目は開けられるものの、体は泥に埋まったようにのろく重く動かない。限界以上に魔法を使つたせいなのはすぐに分かった。学校にいたころ限界の二歩先までやったことがあったが当時はまだ這って動くことができた。いや魔法ではなく下品な子守唄を聞かされていたからかもしれない。少年は戦闘中とは違ってかわった女を見てそう思った。

「お、起きたか少年。死んだかと思っちゃったよ。大丈夫か？ 大丈夫ならドラゴンと馬車がな……」

「こら。病み上がりの人間に何を言ってるんだ。そもそも学生に聞かせていい話ではないだろ」

返事をしようとするが少年の口はゆっくりパクパクするだけで声は出てこない。ここまで疲弊しているのかという驚きと、あの程度の戦果で何もできなくなる身体に落胆の二つが少年に生まれた。心配そうに女が指で突つき、瞳を覗いてくる。荷馬車のなかは夕暮れの暗闇を保持していたが、女の瞳には光があった。

「声が出せないのか……本当に？　見えてる？　聞こえてたら瞬き二回で返事してみて」

少年は言われた通りに二回瞬きをする。女は心配の瞳から子どものように目を輝かせた。

「じゃあドラゴンが馬車とやるのは交尾じゃなくて自慰だよな！」

嬉々として女は言う。こいつは何を言っているんだと少年は瞬きした。してしまった。

「やったー。理解者理解者」

「バカ」

ボコンと大きな拳が女のこめかみを打ち抜く。あひやひやと女は倒れる。

「魔法使い殿、バカがすまないことを……身体の方はどうですか、いやまだ眠ってらっしゃったほうが」

「……いや……大丈夫です。ありがと……ごいます」

バカのせいで少し回復したのかもしれない。少年の声が少し出るようになった。

「いててて、話せるようになったからって無理するなよ

」。明後日は竜祭りなんだから」

「明後日、明後日か。無理をせずに医者にかかったほうが」

「大丈夫です。そんな大げさにならなくても、ただの魔力切れなのでちゃんと一日寝れば治りますよ」

多分と言うのを少年はやめた。ここまで無理に魔法を使ったことはなかったからだ。保護者的役割を果たしてくれている男にこれ以上心配をかけたくはなかった。

「ならまだいいのですが……お前は別の宿な」

「なんでだよー、そいつの尻には興味ないよ。魔法使いはみんなガツバガバだから面白くないもん」

魔法学校での事件を思い出した少年は目を閉じ記憶を闇に追いやる。魔法具の授業で特別講師と呼ばれたこの女が起こした一連の事件は、その授業の聴講生と魔法具研究室全員の尻が終わるという傷跡が残った。

「今は竜殺しかな、興味ある尻は」

「お前の旅の目的は兄探しだろうに……」

「それはそっちがやつといてよ……別に兄が見つかったって私は私を更生しないけど。それより今は生きてる竜殺しが見たいな。普通、竜を殺したやつは力を過信して迷宮とか竜の巣とか行つて帰つてこないし行かなかつたとしても大体毫碌して……だけど次の街の竜殺しは五年前に殺したてのホヤホヤ竜殺し。ドラゴンの話もしたいけど、どんな尻なんだろなー」

「こいつは……この前の司教様の話をもう忘れたのか」
「いいじゃん。何を思っただけの行動しようが、あんたらの
教典にだって保証されてる。少年は？ 生のドラゴンス
レイヤー見たいでしょ？ ガチもんの魔導具だぞー」
「そういえばそんな目的だったなと少年は思い返す。魔
法学校で寮と教室を往復するだけの世界から逃げ出した
言い訳はそんなものだったと思ひ出す。魔物に殺されか
けたり衛兵に追いかけて回されたり変態と同じ部屋になっ
たり、学校にいたのがだいたい昔のことのような気がした。
日の入りとともに少年は眠りに入った。」

一 終わり